



於清水寺本式連歌
附昌程三物

宗祇兼載等

伊地知文庫
文庫20
30



明應二年

清水本式連歌一卷

以應五年

同宗祇獨吟本式一卷

并
昌程三物

ひんがし
後名三幸り
瓶茶ん均あひ
手と字と

經花
橋

伊地知氏書冊

山應子三月九日

何女 於清水寺本武

ふりて花のうらみまをたふら

勝色日津橋の陰 快勝

天津風雲の流連は七深を 兼敬

香行のまじりよひとあそび 行二

露のうらみ乃た名草打あひき 宵柏



起出月

舞

旅

月をみよと起しけし宮
 秋はよみよ城の原
 旅は神の如し
 雲は吹くもなき
 水は流るるもなき
 比里を離れし由り
 鎮秀

泰詭
 宗長
 玄清
 正孝
 宗益
 基仇

出月

長花

契

去る海をわたりて
 思ふ中は誰かたのま
 神は小をいふる
 契つまを来れ世
 見る内をけりひら
 日の新は月いける
 山をいふは
 益

行崎
 二
 裁
 揚
 長
 益

雷

短花

はのちの葉は雪のさしに今おきて
 叶あはまはらるるを道もなかり
 ぬやとて楢の葉はより多きなる
 木陰の花も風をゆはれぬ
 志はつかるる若葉はあはれなむ
 年しらすもなほあはれ
 ありしものもあはれ
 柏 栲 益 蔽 依 栢 祇

和秋

衣袂は霜のかりし
 めたしきもみぢ風梅さしに
 はらるる麻の着るるか
 最ふはふもあはれ
 ひらりあはれ身は枯る人も
 りらりあはれ世にほほえ
 りらりあはれ
 二 長 考 清 依 詠 栢

月用

身みららのの心こころのの事ことををせん
 ああのの心こころのの事ことををせん
 年とし月つきのの事ことををせん
 秋あきのの事ことををせん
 二ふた 祇ぎ 儀ぎ 載さい 清せい 誌し 祇ぎ

平秋

旅

短花

ちのつるきり
口伝とす

唐多

口伝とす
秋の夜ふく

夕ゆふのの心こころのの事ことををせん
 打うちちのの心こころのの事ことををせん
 白しろのの心こころのの事ことををせん
 光ひかりのの心こころのの事ことををせん
 長なが 祇ぎ 載さい 益えき 孝こう 長なが 誌し

三

一ノ月ニシテ
 清菊生小竹のまほしのらん
 人其能念といひあふ古の
 うつらひに彩如也よきまほ
 契あされしものしりし
 あしあし情れす念のこころん
 としこの楓教りけ
 依 柏 清 載 務 二 孝

冬 三 三

冬 三 三
 甲子年 亥 一 也 樹
 かしんしあふいお建ぬ雷打店
 袖小松をたの埋火せんせん
 かしんしあふいお建ぬ雷打店
 又しんしあふいお建ぬ雷打店
 いんしあふいお建ぬ雷打店
 大川
 時 務 長 祇 依 益 柏

平秋

夏月

契

空しくかゝりて秋風乃声
 小山田ふらふら南風あつて
 七月雨くらくて雲をぬか
 中つても月ハ餘波のなれふ
 人のあつたは江さきとほし
 あつて人契さうかかん
 なれぬさうかかんさ長
 二 清 龍 載 依 祇

短花 旅

二つちねにさきあつて清
 東師出るといふとせし
 空もたかひとくも龍雲
 くもたかひとくも海せん
 河さきあつて旅さきあつて
 あつて物んをえあつて
 東師入る海さきあつて
 依 益 二 祇 載

いかづちの秋の山ありぬき年
 朝の霧をいそぎ霧はも
 袖ひひけり露のさるる
 身はくちをらるる葉は
 名 老のうら
 昔の筆は流しゆく
 まはらぬ

祇 二 祇 柏 載 長 祇

秋の山ありぬき年
 朝の霧をいそぎ霧はも
 袖ひひけり露のさるる
 身はくちをらるる葉は
 老のうら
 昔の筆は流しゆく
 まはらぬ

祇 二 祇 柏 載 長 祇

身みのこころのと誰たれよりらん長
 女めのこころのと誰たれよりらん長
 志こころのこころのと誰たれよりらん長
 泣なみだのこころのと誰たれよりらん長
 月つきのこころのと誰たれよりらん長
 初はつのこころのと誰たれよりらん長
 二長 秀 播 佐 清

月つき

初はつのこころ

藤ふじ

夏なつのこころのと誰たれよりらん長
 又またのこころのと誰たれよりらん長
 風かぜのこころのと誰たれよりらん長
 宗むね祇ぎ十一
 杖つえ勝かつ八
 玄げん清せい八
 正せい孝こう五
 截せつ 播は 佐さ 清せい

平へい春しゅん青せい柳りゅう
 祇ぎ長ちやう詭ぎ術じゆつ

無載十一
行二十九
宵柏十
恭謹七
宗長十一

宗益六
基佐十
鎮秀二
行時二

比留
如

雪

の應五年正月九日於清水寺印式
何々
宗祇獨吟

心乃何々六
山々々々々
山々々々々
山々々々々
山々々々々
山々々々々
山々々々々
山々々々々
山々々々々
山々々々々

宗祇獨存生式

表

松

ワキ

梅

表

名所

晴花の月

二ツ

花

三ツ

水

名

所

一ツ

雪 四ツ 月 七ツ

花 五ツ

何

二、表、あ、よ、う、う、う

あ、よ、う、う、う、う、う

あ、よ、う、う、う、う、う

あ、よ、う、う、う、う、う

何となく

とくはつておのり花を月おほひ
夜持来せん風かこりりそ
ゆりももる浪の枕かこりん
かす道はつれおどろく声
果かり流と家こりりおきりて
うわさの雲の影をたぐりわさ
行まの海は誰とさるあま
をく契るれ年月は思

ウ

今らして花を月おほひ
ゆりももる浪の枕かこりん
かす道はつれおどろく声
果かり流と家こりりおきりて
うわさの雲の影をたぐりわさ
行まの海は誰とさるあま
をく契るれ年月は思

の花はさきよの海に花を散る
 りてはなれどもあはれも人
 の心は花の香にまじりて
 我もさきよの月を照らす
 袖はさきよの海に花を散る
 友もさきよの月を照らす
 の花はさきよの海に花を散る
 の花はさきよの海に花を散る
 の花はさきよの海に花を散る

秋の風はさきよの海に花を散る
 の花はさきよの海に花を散る
 風はさきよの海に花を散る
 の花はさきよの海に花を散る
 の花はさきよの海に花を散る
 の花はさきよの海に花を散る
 の花はさきよの海に花を散る
 の花はさきよの海に花を散る

月

紅葉

福の... 秋の...
 初時... 舟...
 舟... 舟...
 舟... 舟...
 舟... 舟...

書

名

舟... 舟...
 舟... 舟...
 舟... 舟...
 舟... 舟...
 舟... 舟...

舟... 舟...
 舟... 舟...

月
寝荒

よは清なる水に花を
もよほすもよほすもよほす
花をたひひしは花を
月をたひひしは花を
福をたひひしは花を
うき世をたひひしは花を
うき世をたひひしは花を
うき世をたひひしは花を

花

五社

ウ

今更なるも花を
うき世をたひひしは花を
うき世をたひひしは花を
うき世をたひひしは花を
うき世をたひひしは花を
うき世をたひひしは花を
うき世をたひひしは花を
うき世をたひひしは花を

朱五旧地四紫水文庫一本古代運説九百句ニヨリ

右字紙抄唯之

大者為中庵石錄之

年... 石... 外

明和七年 寅仲秋

寸書



右本式の二巻、清水寺に一巻、
あてめ外も字紙先一巻、
の和毛子正月下流

の和毛子正月下流

村徑



六算ノクリヤウ

九手 七

九眼 二

九足 三

首 九

腕 四

背 八

右 五

石 六

石 十一

右ヨリ上ハ二字ニテテテテテテテテテテテ
ニハ字ニハ字ヨリシ

誠の心よりいふ先づ
昌隆

元旦

昌隆

老の身もむねの物なるを

かゝるて世にふり門を

却るむのりしは神を

曰

梅の香もくまはしきる今初のみ

神戸の心を海のくまに

初

昌隆

漢書の詩の巻の序の文

昌程

曰

日月星辰之類

昌程

あつちあつちをみる

昌程

物事のふらふら

昌程

曰

日月星辰の類

昌程

日月星辰の類
あつちあつちをみる
物事のふらふら

曰

日月星辰の類

あつちあつちをみる

物事のふらふら

昌程

日月星辰の類

昌程



